

# 跡見学園女子大学学芸員課程 2020年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授  
村田 宏

博物館実習は、以下に記すように、新型コロナウイルス感染予防対策のため、当初の予定が大幅に変更となった。

\*\*\*\*\*

## (1) 春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習

学芸員課程履修生にとって貴重な体験となるはずであったが、見学実習は、残念ながら実施見合わせとなった。また、基礎実習は、すべてポータルを使った遠隔授業で行なわれた。

\*\*\*\*\*

## (2) 夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習

夏期の学外実習は、コロナ禍の困難な状況のなかで、以下の14館で行われた（順不同）。各館には懇切丁寧なご指導とご便宜を賜わった。あらためて厚く御礼申し上げる。なお、実習予定館の事情により実施を見合わせざるを得なかった学外実習は、跡見学園女子大学花籐記念資料館での代替実習に振りかえた。

深川江戸資料館 練馬区立美術館 東京都江戸東京博物館 川口市立文化財センター分館郷土資料館  
埼玉県立歴史と民俗の博物館 岩手県立美術館 千葉市立加曾利貝塚博物館 川越市立美術館 宇都宮美術館  
野球殿堂博物館 市立市川歴史博物館 神奈川県立歴史博物館 郵政博物館 古代オリエント博物館

博物館実習学外実習参加者の「実習レポート」（抜粋）を掲載する。

## M.T.生

実習のスケジュールとしては、10日間で当初の予定ではワークショップ等も組み込まれていたがCOVID-19の影響で無くなり、また密室空間での講座（実習担当の方の話と担当館長の話）も初日のみに変更になった。

### ①学修内容

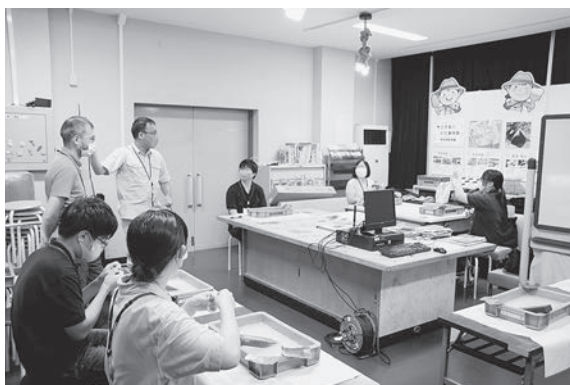
主な学修内容は2つあり、ひとつは館内施設のリニューアル工事に伴う遺構の保護（養生）作業で、もうひとつは実習生全員で立案・構成をする秋の企画展示の作成である。養生の作業は、遺構を間近で見られる機会が今までなかったためとても緊張したことと、縄文の人々の生活様式は知識として知っていただけだったので、作業をしながら「この穴は土が焼けて赤くなっているから炉の役割で、家の出入り口はほとんど両側を向いている」等を教えていただき、イメージがより鮮明に浮かぶようになった。穴を塞ぐ（工事のときに事故が起こらないように平らにする）ために土嚢が入った袋をビニール袋に入れ（湿気で遺構が壊れないようにするため）、穴に入れてその上に透湿シート（湿気は通すが防水になっているシート）を敷くのだが、土嚢がとても重く丁寧に運ぶことに苦労した。

企画展の内容としては一人1点気になった土偶（レプリカ）を選び、文献などで調べ、その土偶の魅力だと感じたことを「恋」に譬えて紹介する内容で、名前は「恋して土偶展」である。私はハート形土偶を選び、その愛らしいフォルムも勿論のことおちょぼ口が魅力に感じたためその部分を紹介した。題名に恋と言う字があるためハートのマークをそれぞれのキャプションに入れ、且つシンプルな色遣いになるようデザインを作った。キャプションは余白の間隔を直したり、漢字にしないで平仮名にするかの相談などの多くのことに時間を割いてしまい、いざパネルを作るときにははてんでこ舞いになってしまった。しかし、今思うと良い経験をしたと感じる。もしまた企画展等を手掛けることになった際はもっと詳しく逆計算して臨みたい。

## ②実習で最も勉強になったこと

実習館では、組紐体験と勾玉造りを経験したが、運営する側の準備や配慮、どういった目的があり体験者には何を感じてほしいかの話を聞いて、子どもたちの行動や保護者の気持ちをきちんと把握していないと開催できないことを学んだ。最終日には館長と副館長から企画展について「シンプルだが目を惹く。題名にインパクトがあるから見てみようという気になる。展示とは実物を見せる行為であると初日に言ったことを理解してくれたと感じた。」等の意見をいただいた。個人的には展示だけで終わってしまい、土偶にテグスを巻いたり実習生で意見を交換したりなどの時間も作れたらもっと良くなったと感じた。

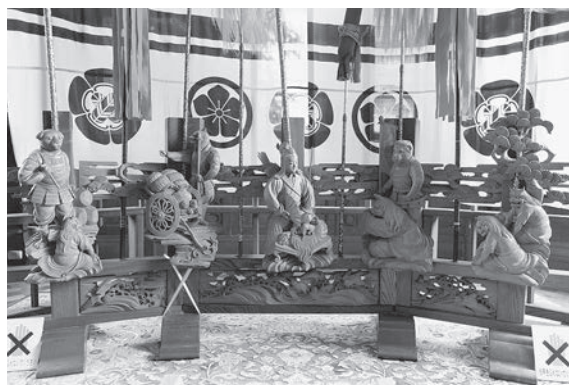
7人という人数全員で協力しようとすると、より多くの意見が出るためまとめることが一苦労であったが、その分良いものができたのではと自負している。初めての展示作業で、リモート授業だけでは学べないことや多くのことを目で見て体で感じ、館の方々の優しさが身に染みる瞬間がある度に恥ずかしくない企画展にしようと意気込む力を得た。また自分がやり兼ねない失敗を事前に察して回避する気配りや、自分の意見をきちんと持ち積極的に行動をすることの大切さを改めて重要なことであると感じた。



## A.K.生

### ①学修したこと

資料館の現状について実際に本館や分館含む四ヶ所を見て、どのように変えていかなければいけないのか問題点をきちんと把握することで、実習中の自身の課題や目標を明確にすることが出来た。また、小学校での歴史教室や、清掃ボランティアに参加したことによって、市民の資料館や文化財に対する意識や考えが分かったため、文化財などをより知ってもらうためにはどのようにアプローチするべきかが明確になった。発掘作業や着物・羽織の保管、文献の記録保存・修復作業（実習用に虫食いなどの状態の文献を模したものを用意してくれた）を行った。デジタル化が推奨されているがやはり人の手でしか行えないことも多くあり、学芸員という職の中でもより専門的な知識が必要なことを実際に経験させてもらった。最終日はコロナ禍での資料館での対策や展示方法について他の学生と共に意見を出し合った。また、資料館最寄りの駅の連絡通路の壁にて展示をしてよいとお話を頂き、実習生も共に展示物を作り、展示（壁に貼る）作業を行った。



### ②実習で最も勉強になったこと

博物館実習で、記録をとることの大切さを学んだ。私は初日に16mmフィルムの映画を見たのだが、65年前の地元の風景がそのまま残されており、私の知らない風景、街並み、人々の暮らしを見て、今まで知った気だったものの、それが間違いであったのだと改めて気づかされた。また、文献の修理・保管、発掘作業を通して、過去の遺物に記録されていることを私たちは読み解き、また記録をしていくことで、先の未来にそれらを残していくが、確かに現物を残しておくことも大切だが、形あるものは、いつかは壊れてしまう。その際に、細かく記録を取っていることで、復元もできるため、記録はとても大切であると気づかされた。また、たとえ雑談や清掃であっても無駄なことは一つもなく、すべての物事は繋がっていると気づ



かされた。大学の講義でも学芸員の仕事は想像していることとは違うと学んではいたが、実際に経験したことによってより強く実感した。

実習では、資料を取り扱ってただ展示をすればいいというわけでもなく、市との協議や一般の方からの調査の依頼、またはこちらから調査を依頼、地域の神社の清掃など、資料館の関係者以外と会わない日がなく、常に人と関わっているため、話術やコミュニケーション力、相手を説得させられるプレゼンテーション力が必要であると痛感した。自分自身が専門的な知識をいくら持っていたとしても、それを相手に理解してもらわない限り、未来に資料や遺物は残っていかないのだと気づかされた。

総じてとても貴重な体験を数多く経験でき、学芸員としてだけでなく、人間としても成長できたと感じられる実習だった。

## S.M.生

### ①学修したことの概要

6日間に亘り実習をさせていただき、一日ごとにテーマの異なる内容となっていた。実習館は、学芸部と企画情報部に分かれており、学芸部の方と情報企画部の方にそれぞれの組織の重要性と仕事内容をご教授いただき、実習生が実践していくという流れになっていた。

初日に、博物館の広報活動についての詳細とデザインの現場にお邪魔をして、集客のアプローチ方法を学び、また学校連携や教育普及の面の問題についても博物館の課題として学んだ。二日目は博物館ボランティア活動の意義と意味を考え、ボランティアのお声を聞いて、学芸部の方との連携の必要性を客観的に学んだ。また、写場見学・撮影体験、収蔵システム、保存環境の講義を受け、資料を永続的に残すための試行錯誤を現実的な問題や現在進行形の課題を学びながら、解決方法を学んだ。三日目から五日目は、民俗・考古・美術・歴史それぞれの分野を専門とする学芸員の方々からご教授いただきながら、調書作成、展示と梱包、模擬展示を行う実践をさせていただいた。

学芸員の方々、お一人お一人のポリシーや価値観を通して、資料と向き合うことの意味と、博物館というステージで資料を魅せることの意味を学び、実際に自分の身体で資料に対してアプローチをしていく際に自信を持って行うことができるかを考えることが必要だと感じた。最終日は、学芸員の仕事を学んだ上で、初日の広報活動に通ずる教育普及について、実習生が実践を行った。実習生個人がテーマを決めて、実習館で行うことができるワークシートを作成し、お互いのワークシートを実践するというものである。学芸員の方々にフィードバックをしていた際に、ワークシートとしての機能は知識を詰め込ませるのではなく、個々の感性を発揮できるものにすることの重要性を学んだ。

### ②実習で勉強になったこと

学芸員は、資料を永続的に保ち、後世に残すために必要不可欠であることはもちろん、博物館に足を運ぶ人々に対して、展示空間で資料の魅力を提示するという場面で必要な存在であることを実習で勉強させていただいた。資料の保存を遂行するには、資料への理解が深く求められる。取り扱う上で資料全てに対してお決まりのルールがあり、その中でも細かな注意事項がある。それらを知識として持ち合わせており、確かに実行できるスキルを携えていることが資料への安全が確保できる。資料の敵に「人間」が含まれる中で、学芸員は資料の保護者となることができる「人間」であると考えられる。

展示における資料の活用では、資料の安全や来館者への配慮といった多方面から資料へのアプローチをすることが求められる。これらは資料の性格を加味した負担にならない展示方法と、来館者に資料を見せるという目的の達成を両立させるために、綿密な計画と経験に基づく発想力が必要になる。また、資料を展示することは展示の空間把握をすることと同義であり、来館者視点で資料を捉えるという広い視野で展示をプロデュースする力も兼ね備えられることもスキルの一つである。

上記の観点だけでなく、資料を活用して研究を深め、常設展や特別展で来館者にギャラリートークや解説、書籍等で学びを与えるという役割も担っていると考えられる。博物館の資料と対面する時、来館者には知識よりも感性を大切にできるようにして





いと学芸員の方々に学んだ。実習を通して、資料は来館者が感性というフィルターを通して学び、学芸員からは専門的な知識を学ぶことができるのだと実感した。学芸員は貴重な学びを提供していただける存在であり、資料によって学びを能動的に得られるための導きを仕込むプロフェッショナルであると学んだ。



花蹊記念資料館での代替実習

\*\*\*\*\*

### (3) 秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

秋学期も、春学期同様、コロナ感染対策のため、ポータルを使った遠隔授業となった。通常であれば、夏期の学外実習で体得した事柄をふまえ、学期末の花蹊記念資料館での模擬展示に向けて企画立案の作業にとり組む段取りであるが、今季は、初の試みとして次のような授業進行を採用した。

#### 1) 企画立案の態様

企画立案は共同ではなく、各自で行う。模擬展示のテーマは、以下の三つのいずれかを選択する。

- a. 卒業論文に関連する任意のテーマ
- b. 歴史・民俗のテーマ（卒論とは別のテーマ）
- c. 美術のテーマ（卒論とは別のテーマ）

#### 2) 展示は、教員の設定した架空の空間を会場とする。

#### 3) 授業担当者と学生は、ポータルをつうじて進捗状況報告とコメントの往復を行い、模擬展示の準備・完成を旨ず（1月の授業最終回まで）。

#### 4) 完成した模擬展示案をPPTによって発表（2月の補講期間内 [2月12日、13日]）。

17名の履修生がそれぞれ知恵を絞って取り組んだ展示テーマは、以下のとおりである。

No.	展示テーマ
1	疫病における妖怪観—病と妖怪—
2	コロリ
3	あの7人が福を連れてやってきた!
4	ファミコンの世界
5	妖怪の表と裏
6	絵で見る明治・大正・昭和の女学生
7	跡見花蹊の教育観～跡見学校開校期を中心に～
8	顔の足跡 —萬鉄五郎の顔と、心と—
9	とある女学生の一日 ～近代の女子教育の歩み～
10	きつねづくし
11	歴史の偉人たちに見る茶の文化～茶器の文化の変遷～

No.	展示テーマ
12	女性画家と自画像
13	江戸の装い
14	家電の今昔（いまむかし）
15	農業と人～暮らしの中の農耕文化
16	明治大正の花街
17	ユダヤ——書の民の足跡——

このうち何点かの展示案を紹介しておくことにしよう。本文中には出品作品（資料）の図版が掲載されていたが、著作権等の問題に配慮して割愛していることをお断りしておきたい。

## 岡田 みず紀

### 「コロリ展」

#### ご挨拶

この度は「コロリ展」にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症が世界各国で大流行し、私たちの日常が奪われております。しかし、感染症と人類の歴史は今に始まったことではなく、遡れば、あらゆる感染症が、この日本でもかつての人々の日常を奪っていました。本展は、そのような日本の感染症の中でも、かつて「コロリ」と呼ばれていたコレラの流行について焦点を当て、コレラの流行模様や、医療がそこまで発展していなかった当時コレラに有効とされていた病除け信仰に関する作品を展示しております。

ご来場の皆様には、今展を通して、改めて病気との向き合い方について考える機会となれば幸いです。

#### 第1章 「コレラの流行」

コレラは1800年代に大流行し、全国で56万もの感染者を出した伝染病です。感染すると短い期間でコロリと死んでしまうため「三日コロリ」と呼ばれ、「虎烈刺」「虎列拉」「虎列刺」などの漢字が当てられました。その感染被害は凄まじく、江戸だけでも7万3千人の人々が亡くなりました。コレラは、虎、狼、狸の字を当てた、アメリカから入って来た恐ろしい妖怪「虎狼狸」だとされ、コレラの蔓延はこの妖怪の仕業だという噂も流れました。それ故、「虎狼狸」の錦絵や風刺画が多く描かれました。第1章では江戸時代における「コロリ」の流行模様を見ていきます。

#### 第2章 「コレラに関する病除け信仰」

江戸時代では医療が十分に備わっていなかったため特効薬も存在せず、富裕層を除いた一般庶民は医者にかかることも難しい時代でした。そうした人々は神仏に祈るしかなく、病を避けるために様々な信仰が生まれ、魔除けや病除けの摺り物や呪具などが求められました。また、時代背景として、攘夷思想などの社会的不安が広がっていました。そうした不安の中で人々は、日本を侵そうとする異国の想像上の動物がコレラを蔓延させているという妄想まで生み出しました。第2章では、コレラに効くとされた魔除けや病除け信仰に関する呪具や郷土玩具などを通して、当時の人々がどのようにコレラと向き合っていたのかを見ていきます。

#### 「虎列刺退治」

人々をおさえつけている妖怪は虎（頭）、狼（胴体）、狸（睾丸）の合体したものであり、衛生隊が消毒薬を噴射している様子が描かれています。絵の中では、コレラで亡くなった広島鎮台の某歩兵大尉の遺体を解剖したことで、梅酢を用いると効き目があるという説が唱えられ、このことが紹介されています。

#### 「茶毘室混雑の図」

この錦絵は、天壽堂蔵梓の「項痢（ころり）流行記」に描かれている口絵です。コレラの大流行で亡くなる人が続出し、江戸の火葬場は大混乱となったことが、この錦絵にも描かれています。棺桶が足りず酒樽を棺桶代わりにしたという話も残っ

ています。コレラが蔓延したことで、画家の歌川広重、戯作者の山東京伝をはじめ、多くの役者や講師が亡くなりました。

#### 「ニホンオオカミの骨を使った呪具」

未知の感染症に恐怖した人々は、異国の「アメリカ狐」などの憑き物がコレラを蔓延させていると考えました。古来より狼の骨は憑き物落としの魔力があるとされており、また、狐の天敵が狼であるという理由から、狼への信仰が高まり、狼の捕獲が急増しました。このことがニホンオオカミの絶滅に拍車をかけたとされています。

#### 「神社姫」

この絵に描かれているのは、1819年の旧暦4月9日に、現在の長崎県に現れたという予言獣です。この生き物は、二本の角をもつ女の顔に魚体が結びついた人魚の一種とされています。神社姫は「竜宮からの使いである」と名乗り、7年間の豊作と、「コレラ」という病の流行を予言したとされています。近年、人々の間で話題となっているアマビコやアマビエに先立つ予言獣の一例で、「その絵姿を拝めば難を逃れられる」という御利益とともにコレラ流行の時代に広まりました。

## 木村 彩音

### 妖怪の表と裏

娯楽としての妖怪と生活の一部としての妖怪という二面性を表現したく、この展覧会名としました。娯楽としての面の方がより人々に知られているため、娯楽としての妖怪を「表」とし、生活の一部としての妖怪を「裏」と表現しました。

#### ご挨拶

皆さんは妖怪と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。恐ろしいものでしょうか、それともマスコットのような可愛いものでしょうか。

近年妖怪は、「娯楽」としての面がとて強くなってきています。江戸時代においても、浮世絵などには妖怪をモチーフにしユーモラスに描かれているものが多く、クスッと思わず笑ってしまうような妖怪を面白おかしく描いているものも多くあります。また反対に少し不気味で恐ろしい異形のもとして描かれているものもありますが、どちらも楽しむために作られたものです。これらのおかげで妖怪は恐ろしくもありますが、いじらしく可愛いというイメージの定着にも繋がっています。

しかしながら元々妖怪は人間の畏怖などの負の感情から生まれたものが多くあります。そのため人々の暮らしとの関りがとても強く、例えば鬼も恐ろしい逸話が多くある一方で、魔よけとして家の玄関や台所などにお札として貼るなど、人々の生活に密接に関わっていました。この展示を通して「娯楽としての妖怪の面」と共に、「人々の生活の一部である妖怪の面」も知ってもらいたいと考えています。

#### 第1章 娯楽としての妖怪たち

近年妖怪は特に娯楽としての面が強くと感じます。特に江戸時代において浮世絵が庶民でも楽しめる娯楽として流行したことにより、「妖怪」も幅広い層に知ってもらい理由となりました。空想の存在だからこそ様々な形を取る妖怪は人々の心を楽しませました。その後、絵だけに留まらず、見世物小屋などでは妖怪のミイラと言われているものが数多く見かけるようになりました。本章では人々の心を楽しませてくれた様々な形の妖怪たちを紹介します。

#### 第2章 生活の一部としての妖怪たち

古くから妖怪は畏怖の対象として恐れられてきました。しかし怖がられてきた妖怪がなぜ人々に親しまれてきたのかという妖怪という恐ろしい姿が描かれたものを家の中や軒先に貼ることで、流行り病や不幸が怖がって入って来なくなると考えられていました。また、不可思議な現象に「妖怪」という名を用いられることも増えました。自然災害など人々にとって悪いことを「妖怪」のせいにし、「妖怪」を祀り、「神」として崇める地域も出てきました。本章では人々の生活に密接していた妖怪の様々な姿を紹介します。

#### 「百鬼夜行絵巻」

「百鬼夜行絵巻」とは妖怪たちが行列をなす「百鬼夜行」の様を描いたとされる絵巻物です。代表的な真珠庵本の他に

数種の百鬼夜行絵巻が存在しており、国内外問わず多くの機関や個人が所蔵しています。妖怪は見た目が可愛いものから恐ろしいものまで多種多様な姿で描かれたおり、人に害を与えるというよりもただ行列をなして楽しんでいるように見えます。色鮮やかな妖怪たちの怪しくも迫力のある姿が描かれており、妖怪を知る上でも貴重な作品です。

#### 「件のミイラ」

件とは牛の体で人間の顔を持ち、必ず当たる予言をするとされている妖怪です。牛から生まれ、人間の言葉を話し、予言をし、生まれて数日で死ぬと言われていました。また、良い予言から悪い予言までこれから起こる出来事を予言するため、予言をする前に殺してしまう地域もあったそうです。しかし、とある件が流行り病の予言をした際に自分の姿を書き写した絵図を見れば難を逃れるといったそうで、その後、件の姿絵を持ち歩くことが流行ったそうです。

#### 「人魚のミイラ」

日本の人魚伝説の最古の記録は619年の『日本書紀』に記述があります。元々日本の人魚は人面魚のようなものでありましたが、江戸時代になりヨーロッパから様々な文化が持ち込まれ、次第に、下半身が魚の姿である現代の人魚像が確立されました。この人魚のミイラは高野山の麓にある西光寺の学文路菫萱堂に保管されているもので、顔には歯としたらしきものが見えます。千数百年前に滋賀県の蒲生川で捕らわれたといわれ、不老長寿や無病息災を願う人々の信仰の対象となっています。

#### 「角大師」

角大師とは天台宗の僧の慈恵大師が73歳の時に世の災厄を憂いて表された護符です。

世に疫病が流行していた永観2（994）年、疫病紙が大師を襲いましたが大使は法力をもって疫病を退散させました。その後疫病の恐ろしさを身をもって感じた大師は疫病で苦しむ人々を救うため、鏡の前で観念三昧をしました。すると鏡に映る大師の姿が恐ろしい鬼の姿となりました。その姿を弟子が書き写し大師自ら加持をし、その札を配ったところ流行していた疫病が収まりました。以降、その札は疫病・厄除け都市、現代でも親しまれています。

---

## 須賀 優帆

### 「跡見花蹊の教育観～跡見学校開校期を中心に～」

#### ご挨拶

1926（大正15）年1月10日に87歳で亡くなるまでの間、日本の女子教育の先駆者として、女子教育の発展を目指し活動してきた女性、跡見花蹊による教育は、文化的・歴史的にも興味深いものである。そこで、今回の展示では、私塾から制度に則った学校へと移行した時期、つまり跡見学校開校期に着目し、その要因や歴史的背景とともに、跡見花蹊の教育観を明らかにする。特に、実践科目として開学当初から開講されていた点茶（茶道）を中心にとりあげ、知育のみに偏らない教育を行っていた様子を主に写真から学ぶ。

#### 序章 「跡見花蹊ってこんな女性」

父親が私塾の経営をしていた影響か、幼時から学問に興味を持ち、特に書はしばしば周囲の大人たちを驚嘆させるほどの手並みであった。花蹊は厳格でひたむきな性格であった、その反面、軽妙洒脱で慈愛に満ちた教育者として信望を一身に集めていた。そんな彼女は、常に学ぶこと、教えること、描くことに加えて、私塾を経営するものとして日々経験を積んでいた。

1840（天保11）年に摂津国木津村（現在の大阪市浪速区・西成区）で、旧家跡見家の次女として生まれた。本名は「瀧野」または「瀧」と言う。1858（安政5）年に自宅を開いていた塾を大坂中之島に移し、1865（慶応元）年には京都へと移り、幕末の動乱期を経て、1870（明治3）年に東京へ移った。1870（明治3）年11月、当時身を寄せていた三崎町（現在の千代田区三崎町・姉小路邸内）に開かれた私塾は、生徒の年齢も性別も一定ではない自由な空気の私塾であった。そして、1872（明治5）年8月の学制の発布を経て、1875（明治8）年に、本格的な学校として今日の跡見学園の前身である「跡見学校」を創設した。1926（大正15）年1月10日没。父親である重敬が自宅で塾を開いていた影響か、学ぶことと教えることを重ねながら成長していた。このように、彼女は、常に学ぶこと、教えること、描くことに加えて、私塾を経営するものとして経験を積んでいたのである。



## 第1章 跡見学校開校の背景

跡見花蹊は揮毫などを通じて公家たちと交流し、若き皇后の女子教育に対する熱心な姿勢に触れたり、女教院というこれまでとは異なるコミュニティに属することによって、私塾の経営者や画家として生きる在り方から、女子のための学校を設立させようという方向へと在り方を変化させていった。跡見学校開校当初は、生徒数が80名という当時の女子校のうち「別格」な規模であった。圧倒的に公家・旧公家の子女たちが多かったことが特徴の1つである。

### ミニコーナー 明治期の女子教育

近世の女子教育では女性が無個性で従順な気質であること、最低限の家事を処理する能力があること、簡単な読み書きが出来ることが最も重要とされた。ところが、学制の発布によって女子教育は大きく変化した。当時の「一般的な」女子教育観では、家庭での妻や母としての役割が求められ、学問は不要と考えられていた。しかし、明治時代になると、文明開化によって徐々に女子に対する教育が広まっていく。それでも、女子の教養は主として家庭教育や見習奉公などに偏っており、その内容は結婚生活への準備が主な目的とされていた。

女子中等教育の内容を法制上明示したのは高等女学校規程が初めてであった。同規程においては学科課程に関して、高等女学校の学科目、学科目の程度、毎週教授時数などを規定した。それによると、高等女学校の学科目は修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音学、体操であって、随意科目として教育、漢文、手芸を加えた。さらに外国語、図画、音楽も随意科目とすることができるとした。

## 第2章 跡見学校における教育内容

従来の女子教育では簡単な読み書きや裁縫・手芸・雑工などの生活に密着した実践の学を教科とするのが主流であったなか、跡見学校では教養を重要視した教育や教養としての教科に点茶を取り入れていた。また「跡見学校」の運営は、花蹊の家族らの協力によってすすめられていった。日本人としての誇りや理性を大切に、一人の人間として成長できる教育を行える環境であった。

## 第3章 跡見学校開校期の教育観

跡見花蹊は、どのような教育観に基づいて、跡見学校での教育を行っていたのだろうか。花蹊の行動や残された言論をもとに、花蹊の目指した教育やこんな女性を社会に輩出させたい、女性を国家の一員として押し上げようとした、意気込みと、当時の花蹊が抱いていたであろう教育観について考える。

### 資料解説

『をりをり草』 1915（大正5）年に出版された、晩年の跡見花蹊による著作。

「現代婦人訓」をはじめとした、花蹊の思うことや若かりし頃にあったことに触れながら語られた本である。本人による和歌や紀行も記載されている。

『女の道』 1941（昭和16）年に出版された、跡見花蹊が当時の女性の教訓として口述していたものを集録したものである。口述した言葉を花蹊の遍歴・実績などを参照にして、不言実行な彼女の目指す女性像や教育などを考察すること目的として記された。

## 関よし乃

「顔の足跡 —萬鉄五郎の顔と、心と—」

### ご挨拶

画家が自分自身と深く対峙しながら描くとされている自画像。画家にとって非常に単純で、最も身近な題材である。しかし自己を描くことは自己探求につながり、自身を見つめ直すことであらわれる思想や精神をもとに「描く」ことは表現の実験場ともなり得る。日本の近代美術の先駆者として知られる萬鉄五郎は、その時代最も多くの自画像を残したことでも知られている。精密な写実の世界とは異なった独特の表現手法で、様々な自身の顔を生み出した萬。異様とも、異形とも言えるその独特な「顔」には萬の何が込められていたのか。「心」を示すとされる表情はどんな表現で萬を写し出すのか。短命で画家としての活動期間



はわずか15年ほどだが、その間最も多くの自画像を描いたとされる「東京時代」「土沢時代」の画業に迫る。表現の変遷に視点を当て、画家が何を求めて何を描きたかったのか、何を感じてどのような自身を見ていたのか。画家の「顔」に隠された「心」を見つめ直す。

## 第一章「東京時代」

萬の自画像の制作時期は大まかに2つの時代に分けられる。その前半期に当たるのが、美術学校後期から卒業後に画家として歩み始めた初期の頃の作品群である。黒田清輝の教えとされる外光派のアカデミックな表現から、卒業後間もなく参加したフェウザン会で表現主義や未来派の流れを模索していた時期の自画像は、柔らかい光の表現から原色奇抜なものまで実に幅広い表現を残している。ここでは、多種多様な表現技法による自画像が何を表しているのかを時系列に沿って見ていく。

## 第二章「土沢時代」

自画像制作の後半期に当たるのが、郷里・土沢にて帰郷した際に描かれたものである。土沢時代の萬は東京の友人に「僕が目を開けている時は、即絵をかいている時だ」と書き送ったくらいに仕事を妻に任せて制作に没頭していたようであった。前半期とは異なり、後半期の自画像群はすべて茶褐色の色彩で描かれているが表現方法はまさに多様を極めている。後に自著で「制作にうえた」という表現を使った萬は、土沢時代は絵に対し真摯に向き合っていた時期だとされる。外の世界から切り離された郷里で、自己と対面しながらどのように自画像が変わっていったのか、画家の生活と内面に燻る自我を思いながら見ていきたい。

## コラム「茅ヶ崎時代」

前章までで見られたように萬の自画像制作は土沢時代で終えている。茅ヶ崎に移ってから死ぬまでに残された自画像は現時点で存在していない。しかし自画像の他にも多くの人物画を残していて、「人」という大きな題材を抱えていたと推測される。ここでは、自画像とともに生涯描いていた「人」の形がどのように昇華されていったのかを紹介する。

## 主要作品解説

### 《自画像》(1911)

この作品は美術学校卒業制作にて提出した作品である。当時は印象派の影響が強い作品となっている。美術学校で学んだ的確な人体把握に加え、黒田清輝以来の平明な描写を基に、印象派の感覚的な色彩表現を織り込んだ作品だ。美術学校の多くの卒業制作は強い意志のある瞳や眼光の鋭いものを表現しているが、萬のこの作品はどこか哀愁が漂う珍しい仕上がりになっている。

### 《赤い目の自画像》(1912-1913)

萬の自画像群の中で特に知名度が高いのがこの作品だろう。美術学校卒業から、様々な機会と新しい美術との出会いから自身の表現への模索と、多くの経験を経てきた時期の集大成とも言える。人と呼べるのかというほどの造形表現と攻撃的な色彩表現とは裏腹に、表情はどこか不安げだ。新しい表現を消化してみせるだけでなく、新しさにたじろぐ萬の精神を表現しているかのようだ。

### 《目のない自画像》(1915)

土沢時代の作品ではキュビズムを経て、次第に簡略化されていく自画像を見ることができる。平面的な表現は実にキュビズム的とも言える。この作品では、それまで簡略化されつつも描かれてきた目や口、鼻さえも定かではない。キュビズムにおける研究をし尽くした結果というよりは、自画像という自己を表現する場において、東京とは一変し美術という世界での枠組みとして閉鎖的な土沢の土地における心情表現の最たるものであったと考えられる。

---

## 前田 愛

### 「江戸の装い」

江戸時代の女性たちは、現代を生きる私たちと同じように様々な道具を使いながらメイクを行っていました。化粧に用いられ

た色は赤（紅）・白（白粉）・黒（眉墨・お歯黒）の三色のみでした。しかし、当時の女性たちはそれらを上手に扱い、紅は唇だけでなく頬・目元・爪に、白粉はベースメイクでは水に溶き、仕上げには粉の状態ですら肌にはたくなど工夫を凝らしました。お気に入りの化粧道具を揃えて鏡に向かう姿は、江戸時代と現代とで変わらない光景だといえるでしょう。

## 第1章 化粧から読み解く江戸時代

江戸時代の女性たちが実際に使っていた化粧品や化粧道具などの資料から、化粧の歴史を振り返ります。紅花の花びらから赤色色素を抽出して作られる『紅』は、染料や化粧料などに供され、江戸時代に産業として隆盛を迎えました。一般的に江戸時代の女性が化粧をする時は、漆塗りの箱型鏡台を用いました。箱型鏡台は天板に鏡をセットできる穴が開いていて、そこに鏡立てを取り付けてから鏡箱ごと鏡を掛けて使われていました。

### 主要資料解説

#### 「紅猪口」（江戸時代後期）

化粧料として精製された紅を、塗り付ける容器。内面に紅が刷かれた碗や皿は「紅猪口」や「紅皿」という。紅猪口には、当初から紅専用として作られたものや食器等を転用したものなど様々ある。

#### 「紅板・紅筆・白粉刷毛」（江戸時代末期～明治初期）

外出時に携行する小振りで軽量化粧道具として紅板、懐中白粉といった懐中化粧道具がある。当資料は懐中化粧道具類のうち、紅板、紅筆、白粉刷毛の組物。

#### 「白粉溶碗・白粉段重」（江戸時代後期）

白粉を溶くための道具。白粉は鉛や水銀、胡粉、白土、米粉などを原料にした。粉末状の白粉に少量の水を加えながら指でよくかき混ぜて溶いて使う。

## 第2章 日常風景のなかの化粧

浮世絵は江戸時代の化粧の有り様を知る上で欠かせない資料です。紅を重ね塗りして唇を玉虫色に輝かせている女性、白粉を手に取り鏡に向かって身支度をしている女性、初めてお歯黒をする女性など、絵画資料の描写から当時の化粧の様子を読み解いていきます。

### 作品リスト

#### 第1章

- 「紅猪口」
- 「紅板・紅筆・白粉刷毛」
- 「白粉溶碗・白粉段重」
- 「お歯黒道具一式」
- 「梅桜蒔絵化粧道具類」
- 「丸に三引両と桔梗紋散蒔絵鉄漿箱」（25×22×25）
- 「蔦唐草蒔絵櫛台」（23.8×36.5×38.0）

#### 第2章

- 「今様美人拾二景 てごわそう」
- 「婦久徳金の成木 うつくし木」
- 「當世名物鹿子 金龍山参詣群集」
- 「栄草當世娘」
- 「譬論草をしへ早引 歯」

## 宮本 佳奈

### 「家電の今昔（いまむかし）」

ご挨拶

私達の暮らしになくってはならない、冷蔵庫や炊飯器などの家庭用電気器具（家電）は日々進化を遂げています。

10年前の冷蔵庫と最新の冷蔵庫を比べれば、見た目にはそれほど違いが無かったとしても、機能・性能の面では大きく違うことに驚くはずです。

生活を助けてくれて、豊かにしてくれるこれらは、昔からあったものではなく、また高価で誰もが買える物でない時もありました。今の暮らしでは考えられないくらい、1つのことにかかる手間暇が多い、大変な時代があったのです。

今回の展示「家電の今昔（いまむかし）」では、私達にとって当たり前の冷蔵庫・テレビ・コンロ・炊飯器が、昔「どんな姿をしていたのか」、4つの時代ごとに比べて、その進化・変化について楽しみながら知っていただきたいです。

#### 第1章 戦前の暮らし

この時代には、まだ私達の見慣れた家電はありません。洗濯をする時は洗濯板を使って自分の手で洗う。火を起すのも火加減を調整するのも、自分で。スイッチ1つではいけない時代です。

#### 第2章 「戦後～高度経済成長期～の暮らし」

高度経済成長期には、画期的な家電が多く誕生し、人々の生活様式は変わっていきました。炊飯器などの私達にとって身近な家電の「先祖」もこの時期に誕生しました。形は似ているでしょうか？

#### 主要資料解説

##### 白黒テレビ「シャープ 国産第1号テレビ（TV3-14T型）」

1953年に早川電機工業株式会社、現シャープ株式会社より発売された国産第1号の14型白黒テレビ。高卒の初任給が5,400円だった当時、175,000円という価格で発売されました。

他社に先駆けて発売・量産され、日本におけるテレビ時代の幕が開きました。

##### 電気炊飯器「東芝 自動式電気炊飯器ER-4」

1955年、国産初の自動式電気釜が東芝より発売されました。タイムスイッチで希望の時間にご飯が炊け、炊飯が終了すると自動でスイッチが切れるという画期的な性能は、主婦の家事労働に要する時間だけでなく、日本の生活様式にも大きな変化をもたらしました。

#### 第3章 平成の暮らし

平成の家電は高度経済成長期に登場した家電と比べると、機能・性能の面が進化しています。具体的にどのような違いがあるのか、比べてみてください。

#### 第4章 これからの暮らし

この章では、最新の家電を見ていきます。実際に触ってみて、「昔の姿」と比べながら、これからの家電はどうなっていくのだろうか、想像を膨らませてみてください。

---

## 森田 紗映子

### 「農業と人～暮らしの中の農耕文化」

ご挨拶

私たちが生きるために必要な「食」。農業は今も昔も私たちの暮らしの支えになっています。現在は農作業の負担を軽減させ効率を高めるため、農具の機械化が進んでいます。しかし、以前は昔ばなしで描かれるように人力や馬や牛といった家畜の力



で行っていました。手作業で使われる農具は、日常的なものであり生活を繋ぐ重要な仕事道具でした。また、力仕事の農業が中心となる日々を送る人々は、自然に畏怖と感謝を抱き、農耕に関わる信仰を大切にしていきました。年中行事や祭礼などで神に祈り感謝をするといった文化が築かれ、伝統として受け継がれています。本展では、農業にまつわる人の暮らしに焦点を当てます。現代を生きる私たちとの生活の違いや共通点を見つけながら、農耕文化の世界を味わっていただけたら幸いです。

## 1章 「人と農耕と神様」

1章では、五穀豊穡を祈る農耕民の年中行事の内容とともに、農業にまつわる信仰についてご紹介いたします。

農村の人々の一年は、農耕が中心となります。その生活は、山や川からの水や日光など自然の恵みに生かされ、大雨・洪水・生き物の被害といった自然の脅威と隣り合わせの日々です。圧倒的な存在である自然に対して、人々は神頼みをするという文化が築き上げられていきました。年中行事では、気候や天候の変わり四季折々の自然の変化によって、農作物に対しての作業内容も変わっていきます。農業という生業と併せて儀礼という形で「神様」への感謝と祈りを示す機会があります。農耕に関する儀礼の数々には、当時の農耕民の想い感じることができます。農耕文化の信仰で広く知られているのは、「田の神」と呼ばれる神様です。農耕民にとって生活の中心の農耕という、自然との闘いである重要な営みの成功を祈ることができる神が全国的に祀られています。農耕を通して人の暮らしの中に存在を確立させた神様、そして自然より人が見いだした農耕の信仰は、農業を生業とする人々にとってなくてはならない「支え」となっていたのです。

## 2章 「人と農具」

2章では、農業には欠かせない農具の数々をご紹介いたします。

現在のように農具が発達して機械化が進む以前の昭和30年頃までは、江戸時代のものと同じく変わらない農具が使われていました。機械のように複雑な構造ではなく、木を中心に鉄や石といった材料で構成されたものです。田植えをする前の田に水を入れ、土を砕いて均等にしてい「代掻き」から収穫までの作業はほとんど人力で行われていました。大変な力仕事である農作業で活躍していた伝統的な農具は、日本では使用されることも減少しています。農耕文化という日本の貴重な歴史の中で身近な道具であった農具を見て、触って、持ち上げて、当時の農耕民になった気持ちで楽しんでみて下さい。

### 主要資料解説

資料名：千歯扱き（せんばこぎ）

年 代：～昭和30年代頃まで

法 量：本体高さ56cm、幅58cm、歯長25cm、脚長103cm

場 所：神奈川県麻生区

千歯扱きは稲や麦等の穀粒を脱穀する道具。地域によっては「かなごぎ」とも呼ばれる。歯の隙間に稲の穂を差し込み引っ張ると穂から籾（もみ）が取れるという仕組みになっている。歯の部分は木製から鉄製と時代によって材質が変わる。木製の場合は歯の部分と台木が一本の木で作られているものもある。鉄製の場合はカートリッジ式になっており、歯が折れたら換えられ、長持ちができるように工夫されている造りになっている。

資料名：タノカミ（田の神）

年 代：明治時代（?）

法 量：高さ31.3cm、幅19.1cm、奥行12.6cm

場 所：鹿児島県

田の神の像はムラの水田のほとりに祀られているものである。米の研ぎ汁で顔を白く塗り、目と眉は墨、口と襟は紅で描かれている。右手には杓子を持ち左手にはお椀のようなものを持つ。田の神とは、稲作農耕の神様で、稲作を見守り、そして豊穡をもたらしてくれる、農耕民にとって有難い存在である。タノカミをご覧いただくと、温かみのある微笑みが特徴的であり、親しみやすい風貌の神様である。



模擬展示案発表時の様子